文学部
准教授　佐藤　岳詩

　人種や思想信条、宗教が違う人たち、性的マイノリティの人たちをはじめとした「他者」を自分よりも劣った存在と決めつけ、嫌悪し、憎む。そしてそのような態度をインターネットやデモ、日常生活を通じて、公然と露わにする。そのようなことが世界中に拡がっています。

　著者のエムケは本書の冒頭でこう述べます。「ときに私は、彼らをうらやむべきだろうかと考える」。自分は絶対に正しいという確信をもって、誰かを見下し、憎み、攻撃することは何がしかの愉悦をともなうものであり、そうしているうちは、不安、躊躇いや迷いといった苦悩と無縁でいることができます。「他者を尊重することを拒絶し、それどころか、できる限り大声で誹謗や偏見を叫びたてる者こそが、自分を誇らしく思っているように見える」。

　しかし、エムケはそうした憎しみに抗いたいと述べます。ドイツやアメリカでのいくつもの具体例を挙げながら、無視され、いないことにされている人の言葉を聞き取ろうとし、不純・不自然と言われて蔑視され、排除されている人に寄り添おうとします。

　他者の、そして自分の中の憎しみに立ち向かうのは簡単なことではありません。それにはたくさんの勇気がいります。自身も迷いながら憎しみとの向き合い方を探すエムケの言葉はそうした勇気をほんの少し与えてくれるものだと思います。

『憎しみに抗って －
不純なものへの賛歌』
カロリン・エムケ；
浅井晶子訳
(2018,みすず書房)

【所蔵情報】

本館	資料ID	110726098
	請求記号	K/316/E52
靖国分館	資料ID	111182895
	請求記号	/316/E52/